第４９０回　史跡めぐり

平成３０年5月２７日（日）

岩槻区南東部とベトナム寺院

卯之助の力石、戦争遺跡の越谷陸軍飛行場跡や

日本ではじめてのベトナム寺院などを歩きます。

順路　全行程 **徒歩 約7.46 ㎞**

ＪＲ「南越谷駅」南口に集合　午前８時００分

ＪＲ「南越谷駅」→ＪＲ「東川口駅」・ＳＲ「東川口駅」→

ＳＲ「浦和美園駅」東口

① **保寿院：旧埼玉郡 釣上新田**

② 「岩槻型」青面金剛像庚申塔**：旧埼玉郡 釣上新田**

③ **玉泉寺：旧埼玉郡 釣上村**

④ **神明**社（卯之助の力石）

：旧埼玉郡 釣上村

⑤ **「椿割塚」：旧埼玉郡** 西新井**村**

⑥ 西教院**：旧埼玉郡** 西新井**村**

⑦ **光明院跡：旧埼玉郡 後谷村**

⑧ 越谷陸軍飛行場跡

：旧埼玉郡 小曽川村・砂原村

・荻島村・末田村

・高曽根村・孫十郎村

⑨ **南和寺（ベトナム寺院）**

：旧埼玉郡 小曽川村

南和寺（ベトナム寺院）
「花祭」
（撮影：２０１８・５・２０）

「しらこばと水上公園」バス停前で解散

午後０時３０分頃

※　朝日バス「越谷駅西口」行き

午後０時４０分・１時００分・１時２５分 の「始発」がございます。

◎案内者　常任理事　桑野 秀明・理事　尾川 芳男

実行委員　逢見 **俊人・河内 出・高橋 誠一**

NPO 法人 越谷市郷土研究会

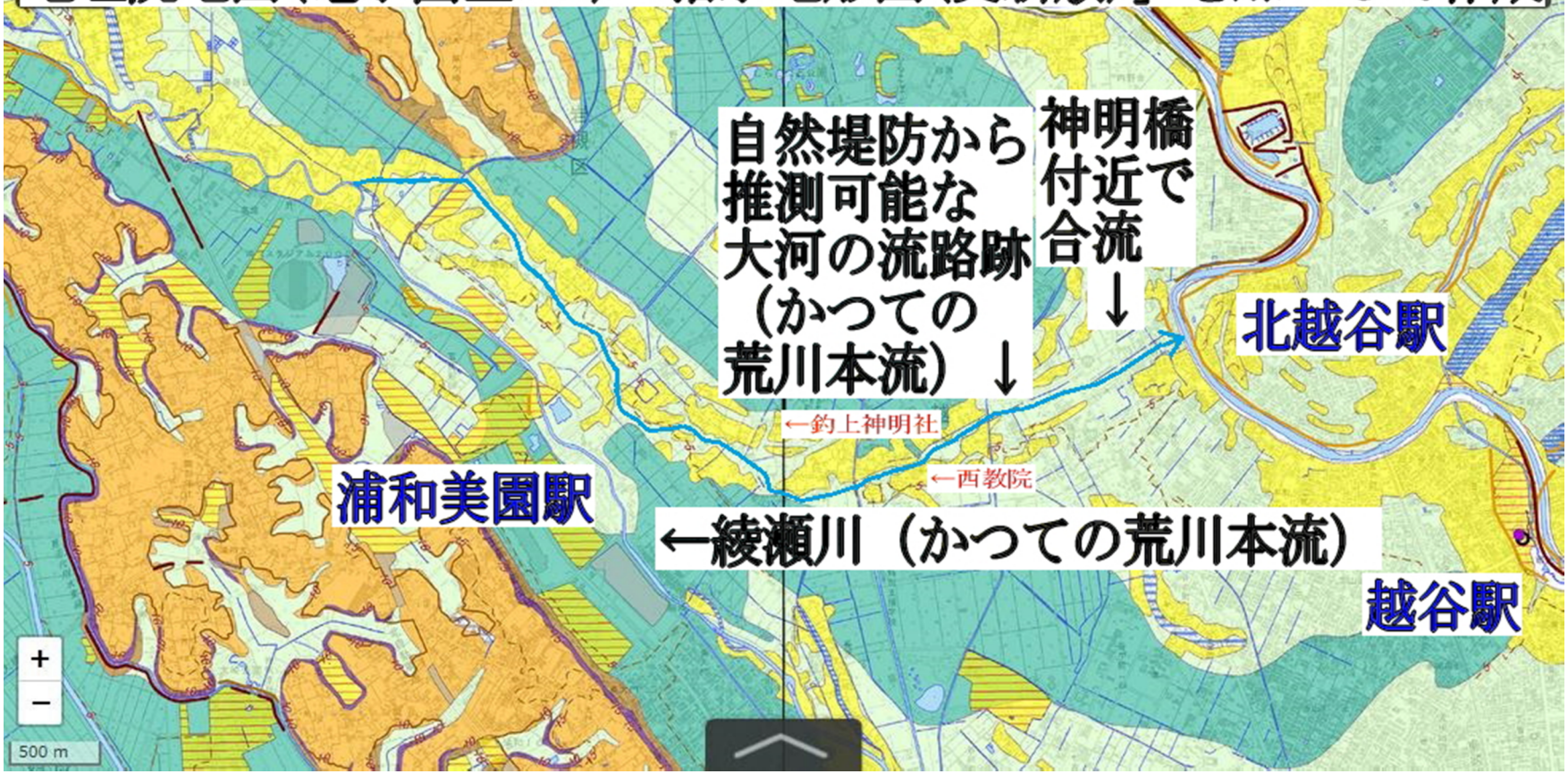
国土交通省 国土地理院 「地図・空中写真閲覧サービス」を加工して作成

空中写真データ：整理番号 CKT20031 コース番号 C4 写真番号 19 撮影年月日 2003/05/01(平15)
撮影地域 さいたま 撮影高度(m)1920 撮影縮尺 12500 カメラ名称 RC30 焦点距離(mm)152.940
カラー種別 カラー 写真種別 アナログ 撮影計画機関 国土地理院 市区町村名 さいたま市岩槻区

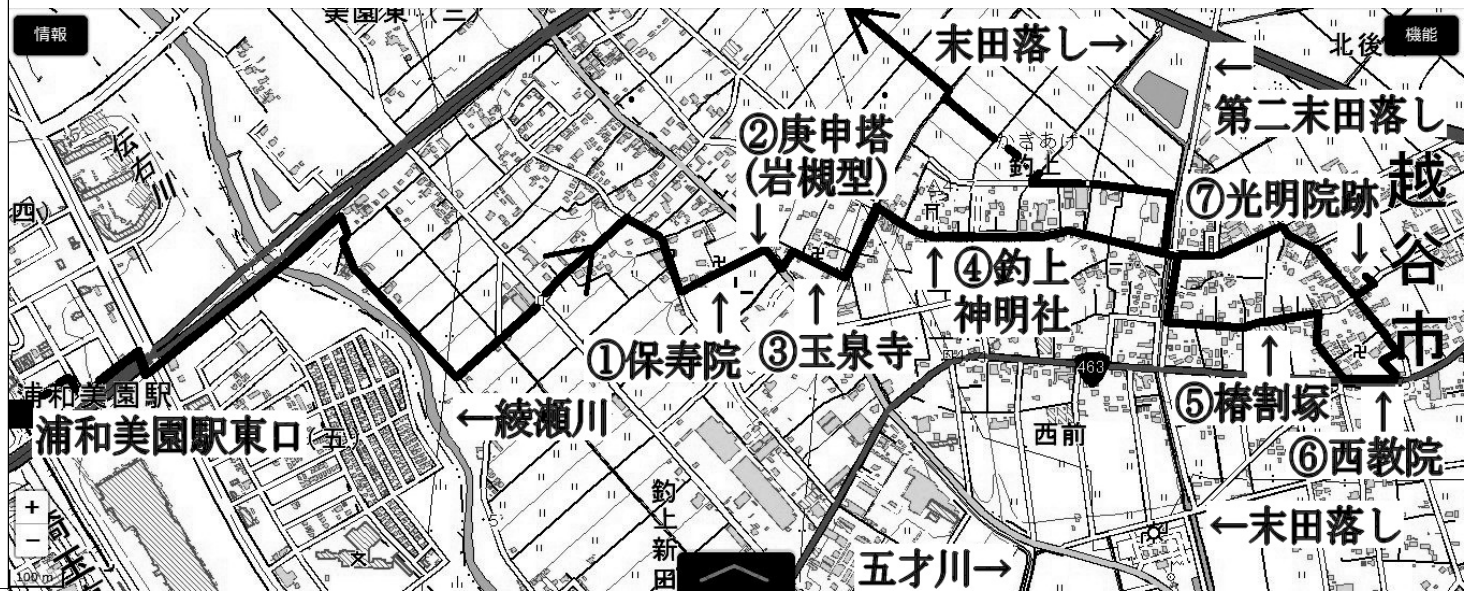
※ 国土交通省 国土地理院コンテンツ利用規約

1．当ウェブサイトで公開している情報（以下「コンテンツ」といいます。）は、
どなたでも以下の1）～7）に従って、複製、公衆送信、翻訳・変形等の翻案等、
自由に利用できます。商用利用も可能です。（後略）

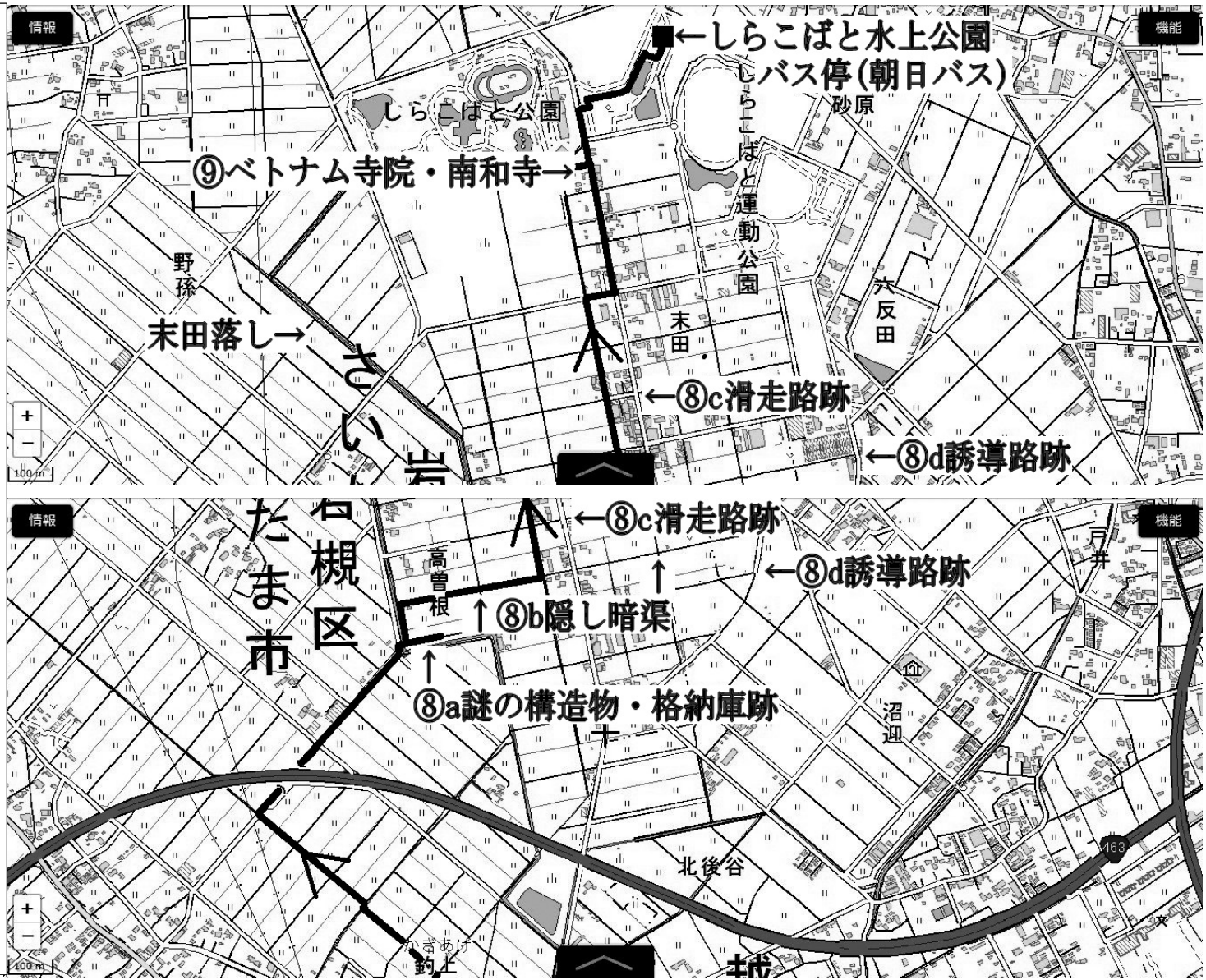
地理院地図(電子国土Web)「治水地形図(更新版)」を加工して作成



岩槨型青面金剛像庚申塔(持物Aタイプ)



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」を加工して作成



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」を加工して作成

ＪＲ武蔵野線「南越谷駅」南口に集合　午前８時００分

ＪＲ武蔵野線「南越谷駅」　午前８時０３分

ＪＲ武蔵野線「東川口駅」　午前８時０７分

※　待ち時間：６分

ＳＲ埼玉高速鉄道「東川口駅」　午前８時１３分

ＳＲ埼玉高速鉄道「浦和美園駅」　午前８時１６分

※　トイレ休憩

※　出典（しゅってん）は以下のように、略して記しました。

①『新編武蔵風土記（ふどき）稿』は『風』

②『武蔵国郡村誌（ぐんそん）』は『郡』

③『岩槻市史 金石史料編Ⅱ 近世・近代・現代史料』は『金』

④加藤 幸一「荻島地区の石仏」は『荻』

※　④は、「NPO 法人　越谷市郷土研究会」ホームページに掲載。

旧 釣上（かぎあげ）新田

『風』では「釣上（かぎあげ）新田は開墾の年代を伝へざれど、古より岩槻城附の領にして」、「村内南の方に日光御下道かかれり」と書かれています。

『風』では旧 釣上（かぎあげ）新田の「小名（こな）」は、西ヶ尻、八丁目耕地、道下耕地、五段田耕地であることが書かれています。

『風』では旧 釣上（かぎあげ）新田の「綾瀬川」の説明として、「村の西南を流る、川幅十間許、則當（埼玉）郡と足立郡の界なり」と書かれています。

『風』では旧 釣上（かぎあげ）新田の鎮守は、玉宝院持ちの「稲荷社」であることが書かれています。

①**保寿院**（釣上(かぎあげ)新田自治会集会所）：旧埼玉郡 釣上(かぎあげ)新田

『風』では宗派は**新義真言宗**(しんぎしんごん)、（旧）**尾ヶ崎村勝軍寺**の門徒、山号・寺号は■**知山観音寺**、本尊は**如意輪観音**であることが書かれています。

1．供養塔（延宝二年（1674）地蔵菩薩像）（形態）舟型光背型

2．庚申塔（延宝四年（1676）三猿）（形態）舟型光背型

3．供養塔（延宝七年（1679）阿弥陀如来像）（形態）舟型光背型

4．庚申塔（□化六年（1809）青面金剛像）（形態）山状角柱

5．庚申塔（弘化四年（1847）文字）（形態）山状角柱

6．墓石（元治元年（1864））（形態）五輪塔　※　甲州武田の家臣

（出典『金』）

※「**岩槻下道（日光御下道）**」：旧埼玉郡 釣上(かぎあげ)新田

『浦和市史　通史編Ⅱ』では、「**岩槻下道（日光御下道）**」の説明として、以下のように書かれています。

「鳩ヶ谷から岩槻へ至る経路は、かならずしも大門宿を経由するとは限らなかったとみられる（杉山正司「日光御成道の成立について」『大日光』六〇号）。すなわち、大門宿の南の貝殻坂を下って綾瀬川を渡り、**釣上**・笹久保を経て岩槻に至る『新編武蔵風土記稿』で**日光御下道**と称される道の通行が、多かったと考えられる。笹久保村（現岩槻市）の**元禄十年（1697）**の村絵図には、村の中央を貫通する道に「**御成道**」と記され、一里塚も描かれている。

この**下道**は、**安永五年（1776）**にも家治が社参の帰途に通行している（『近世史料編』Ⅱ、654 頁）。また**寛政十二年**の法会の通行の際にも大雨のため、御成道筋宮下村（現大宮市）地内さやどの窪地に水がたまり、馬が通行できず

岩槻への継立はこの**下道**を使用している（会田真言家文書三七）。『遊歴雑記』は、貝殻坂に関して、坂は急ではないが長く、樹木におおわれ暗く、道もかなり悪い、と記している。**下道**は、この貝殻坂と綾瀬川の渡河を除けば、あとは平たんな道であり、鳩ヶ谷と岩槻との間の道程も大門を通過するより半里ほど短く、旅人に利用されることも多かった」

出典：兼子 順（1988）『浦和市史　通史編Ⅱ』浦和市 p.294.295

②「**岩槻型青面金剛像庚申塔**」：旧埼玉郡 釣上新田

岩槻型青面金剛像庚申塔

左右六本の手の内「中段」の二本の手が「合掌」し、

残りの左右の「上段」、「下段」のいずれかの手で、

「（女）人（ショケラ）」を持ちます。

(持物：Aタイプ)

剣　　人

　合掌

矢　　弓

（三猿の配列：Aタイプ）

口・耳・目

（笠付型）本塔 177×75×75　台石 35×64×64㎝（『**金**』）

さいたま市岩槻区釣上新田　路傍

宝永五戊子天霜月吉祥日

（ウーン）　奉造立**庚申像一躯**為二世安楽也

出典：中山 正義（1997）「岩槻型青面金剛一覧表」自家製版

※　[備考]昔はお稲荷様がとなりにあったが、お稲荷様だけ移したという。
（出典『**金**』）

旧 釣上村（かぎあげ）

『風』では「**釣上村**は騎西庄**越ヶ谷郷**と唱ふ、**慶長年中**検地帳に、武州騎西郡**越ヶ谷之内釣上**と載たれば、古へより**越ヶ谷郷**に属せしこと知らる、當村開闢のことは、**元禄十一年**岩槻の城主へ書出せしものに、**百九十八年以前**より民家建はじめしよしを記せり、されば**文亀**（ぶんき）の頃より追々開けしなるべし」、「村内 坤（ひつじさる） の方に**日光御下道**かかれり、是大門宿より分れて、岩槻宿へかかれる往来なり」と書かれています。

『風』では**旧 釣上村**（かぎあげ）の「**小名**（こな）」は、木淵、深町耕地、八町目であることが書かれています。

『風』では**旧 釣上村**（かぎあげ）の鎮守は、**円福寺持ち**の「稲荷社」であることが書かれています。

③**玉泉寺**：旧埼玉郡 釣上村

『風』では宗派は禅宗（ぜん）曹洞（そうとう）派、**（旧）尾ヶ崎村光秀寺**の門徒、山号・寺号**医王山玉泉寺**、**慶長二年（1597）四月十八日**に亡くなった**玉泉心奉**という僧が開山、本尊は**十一面観音**であることが書かれています。

1．供養塔（寛文四年（1664）地蔵菩薩像（寒念仏供養））

（寸法）本塔 97×41×32　台石上 13×47×44

（形態）舟型光背型

※「寒念仏」初見は、天文四年（1535）埼玉県新座市畑中・東福寺

出典：縣 敏夫・芦田 正次郎・小花波 平六（1985）
『石仏研究ハンドブック』雄山閣出版 p.314

2．庚申塔（寛文十二年（1672）三猿）（形態）舟型
3．庚申塔（享保四年（1719）青面金剛像）（形態）唐破風付角柱
4．供養塔（享保十四年（1729））（形態）笠付角柱
5．庚申塔（元治元年（1864）文字）（形態）山状角柱
6．馬頭観音（明治廿一年（1888）文字（馬頭浮彫））（形態）駒角柱
7．六地蔵（残欠）（※年代不明 地蔵菩薩像×6）
（出典『金』）

※　トイレ休憩

④神明社：旧埼玉郡 釣上（かぎあげ）村

『風』では旧 釣上（かぎあげ）村にある二つの鎮守のうちの村民持ちの「神明社」（もう一つは円福寺持ちの「稲荷社」）であることが書かれています。
さらに、「神明社」の説明として、以下のように書かれています。
「（前略）　元は竹木生ひ茂れる山中にありし小祠なりしが、賽人多く、貞享年中に至り、彼山を伐り開き社を造立せしより、■近村にきこへて、今も参詣のもの多しといふ」
また、末社として、八幡　春日　稲荷　疱瘡神　荒神　愛宕　久伊豆　子易明神　雷神　三峯　天神があることが書かれています。

1．力石
（寸法）68×43×31

（形態）自然石

[銘文]奉納力石神明宮御宝前　宝暦四戌（1754）六月吉日　石四[　]貫目

大相模六条　秋山利助

２．力石

（寸法）70×51×12

（形態）自然石

[銘文]奉納　雲龍石　文政十三寅（1830）三月吉日

武州岩付領　三ノ宮三橋卯之助　□□郷小島久蔵

釣上新田縄手石願主森田吉エ門　同恩間村木村重治良

３．力石

（寸法）37×43×24

（形態）自然石

[銘文]奉納指三十七[　　文政十三[　（1830）三月[

（出典『金』）

「三ノ宮卯之助の力石（2 ）」では、「神明社」の「力石」の説明として、以下のように書かれています。

「【埼玉県久喜市太田袋・琴平神社】{高島他（44）・久喜市史編さん室（67）

「奉納　文政八酉正月吉日　五拾貫目余　當所　高橋繁蔵持之　長宮村　肥田文八持之　太田袋村　□井口持之　同村　□□□　三ノ宮村　三橋卯ノ□□□」（1825）75×41×33㎝

この神社は、最近まで「諏訪神社」と呼ばれており、二ノ鳥居には花崗岩の「諏訪神社」の額がある。一ノ鳥居には赤色木製の「琴平神社」の額が掲げてある。現在は神社庁の諒解の元「琴平神社」となっている。

卯之助らが「力石」を奉納した頃は、神杜の 400m 程東に大きな川（元の利根川、後に古利根川、現在は葛西用水堀）があって、舟運の盛んな土地であったという。江戸期には、この地域は、岩槻藩領であったから長宮村の肥田文八や三野宮村の卯之助らも気安く往来していたのであろう。

ここでの奉納力石には地元の力士 3 名も加わっていることからすると、かなり盛大な催しではなかったかと思われる。

肥田文八の力石は、埼玉県に 4 個、千葉県に 1 個の総計 5 個を確認している。

卯之助は、前述のように肥田文八の指導で一人前の力持ちに成長し、ここ太田袋の奉納力持ちに参加し、その名を初めて「力石」に刻した記念すべき場所で、卯之助 18 才の時である。彼の名が「三橋卯之助」となっているが、文政 13 年（1830）の刻字がある岩槻市釣上の神明神社の「指石」でも「三橋卯之助」となっている。

三橋については、彼の生家近くの元荒川に「三野宮橋（架橋年代は不明）」があることから「三野宮僑卯之助」としたが、長すぎるので「三橋」とした説がある。

【埼玉県岩槻市釣上．神明神社】｛竹森章・高崎（59）・岩槻の金石文（68）・栗原（69）｝

「奉納　指石　三十七メ目　文政十三年寅三月吉日　三ノ宮　三橋卯之助　森田吉右エ門」（1830）37x43x24cm

「奉納雲龍石文政十三年寅三月吉日三ノ宮卯之助江戸本郷小嶋久蔵釣上新田縄手　森田吉右エ門　恩間村　木村」（1830）70x50x12 余㎝

の三十七メ目は、卯之助にとって軽量級である。これと同程度（三十五貫前後）の石が下記に現存する。

【埼玉県岩槻市新方須賀の香取稲荷神社】1 岩槻の金石文（68）1

「奉納　三十メ目　須賀村　三野宮卯之助」52×40×30㎝

【埼玉県川口市峯の峯ケ岡八幡神社】｛高島（9）・柳田（65）｝

「指石　三十五貫目　三ノ宮卯之助　當村常次郎　石工千代吉」58x42×12㎝

これらは出身地に近いことなどから卯之助初期の力石と思われる。

また東京都江戸川区北小岩の北野神社にも「卯之助力石」としては軽量級のものがある。

【東京都江戸川区北小岩・北野神社】｛高島（5）・鷹野（70）1

「武昜岩附三之宮卯之助本所権治郎差上」57×43×26㎝

「奉納三十八メ目武昜岩附三之宮卯之助本所権治郎差上 163x38x23㎝

これらの二個には、「本所権治郎」の名が併刻され、三野宮から距離的に離れていることから、やや時代が下がり、卯之助の江戸進出の第一ステップとも考えられる。

以前、北野神社の力石は一個であったが、現在は無銘の一個を含め三個になっている。

出典：高島 愼助・高崎 力（2004）「三ノ宮卯之助の力石（2 ）」四日市大学論集 第17巻 第1号 p.47,48

「さいたま市」のホームページでは、「神明社」の「古式土俵入り」の説明として、以下のように書かれています。

指定の区分　　国指定 重要無形民俗文化財

指定名称　　岩槻の古式土俵入り（いわつき　こしきどひょういり）

指定年月日　平成17年2月21日

保持団体　　釣上の子ども相撲土俵入り保存会

公開場所　　神明社（岩槻区大字釣上220）

公開日10月の第3日曜日

要　鷹や虎、鯉など勇壮で縁起の良い柄をあしらった色とりどりの化粧回しを身につけた幼稚園から小学校6年生までの男児が、土俵入りの型を披露します。子どもたちは「年少組」と「年長組」に分かれ土俵入りを行いますが、年長組のうち最年長者3名で「三役」、三役に1名を加えた4名で、「二人組」「四人組」の土俵入りを行います。

【土俵入りの流れ】

神社到着後、本殿に参拝　→　土俵場に移動　→　神職による御祈祷　→
年少組の土俵入り　→　年長組の土俵入り　→　三役の土俵入り　→
行司に祭文【神々に口上を述べる】　→　二人組の土俵入り　→
四人組の土俵入り

出典：「さいたま市のホームページ」
http://www.city.saitama.jp/004/005/006/001/019/012/001/p012169.html

※　「自然堤防」の分布から、**現・綾瀬川**より分かれて東に向かった流れが、かつての「**荒川**」の**本流**として、**現・神明橋**の**北側付近**で、**現・元荒川**に**合流**していたことを推定することができます。

※「青面金剛像庚申塔」：旧埼玉郡 釣上村（かぎあげ）

1．庚申塔（享保廿年（1735）青面金剛像）

（寸法）本塔101×52×42　台石上13×51×48

（形態）唐破風付角柱

（出典『金』）

旧西新井村

『風』では「當村御入国の後御料所なりしが、**寛文二年（1662）土屋相模守**領地に賜はり、後上りて元禄十一年（1698）小笠原佐渡守に賜はり、是も宝暦六年（1756）上りて御料となり、同年地を裂て大岡出雲守に賜はりしより、今は御料及び大岡主膳正が領地入會り」と書かれていますが、「**土屋相模守（政直）**」は「**土屋但馬守（数直）**」の誤りであり、天和二年（1682）から元禄十一年（1698）までは、「**堀田豊前守（正休）**」の領地であったと推測できます。出典：秦野 秀明（2015）「寛文二年（1662）二月二十二日以降の「越ヶ谷領内」土屋領の変遷」越谷市市民文化祭

『風』では**旧 西新井村**の「**小名**」は、堀ノ内、立野、前谷、土合、外谷、西前であることが書かれています。

『風』では**旧 西新井村**の鎮守は、「**石神社**（「**石神井社**」の誤字）」であることが書かれています。

※「浄庵沼」と「浄庵堀」

「寛政五年十二月　**野島 浄 山寺口伝書（慈福寺 浄 山寺と改名 并 口伝諸記録）**」（越谷市 浄 山寺蔵）（『越谷市史 第三巻 史料一』p.897-898）では、「夫より八年目弥廻国之節武州崎西郡**大沼**之脇ニ至り李之花開盛仕候を見而」のように、**旧 野島村 浄 山寺**の付近に「**大沼**」が存在していたと解釈が可能なことが書かれ、また、「白扇著　元治元年八月　**斎藤来由**」では、

野島の地蔵尊（浄山寺）の前の「**浄庵沼**」に身投げした後の遺骸が**旧 西新井村**の**旧 斎藤家屋敷**に流れ着いたことも書かれています。

つまり、**旧 野島村**の**野島の地蔵尊（浄山寺）**の前から**旧 西新井村**の**旧 斎藤家屋敷**にかけて、「**広大な沼沢地**」が存在していたと解釈が可能なことが書かれています。

2015 年 7 月 12 日に開催された「河川史研究倶楽部」の巡検の際には、**旧西新井村**のＴ家（屋号は「**浄庵**」）の東側の道路が、「昔は、「**浄庵堀**」と云う水路であった」との言い伝えを、聞き取り調査で確認しています。

⑤「**椿割塚**」：旧埼玉郡 西新井村

16.『椿割塚』石塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　西新井・田村家 道路反対側路傍の祠

石塔型式　隅丸角型（南向き・高さは中）

年号　天正十八年（1590）（実際の造立年月日は不明）

［正面］

天正十八庚寅天　太田下野守室

正雲院殿華嶽周宝大信女

六月十日

（出典『荻』）

※斎藤家の椿割塚とは、椿が植えられたという斎藤家二代目の母の塚

「椿割塚」には逸話がある。戦国時代の末期、豊臣勢によって岩槻城が攻められたため、城から西新井の斎藤家に落ちのびようとした岩槻城主太田下野守（しもつけのかみ）氏房の妻が、息子五歳の岩月丸（いわつきまる）を残して沼に身投げした。天正十八年のことである。その母

の遺骸を埋めた塚には椿の木が植えられたという。岩月丸は、後に斎藤家初代の末の娘を妻として二代目を跡継ぐ。
（出典『荻』）
《椿割塚の伝説》
天正十八年（1590）に豊臣勢は北条氏の本拠である小田原城を攻める。北条氏の支城である岩槻城では、城主太田氏房が小田原城にいての留守中に豊臣勢によって包囲され攻められる。
古文書「斎藤来由」（元治元年 8 月 23 日に 73 歳の白扇著）によると次の通り。（平成三年度　越谷市郷土研究会古文書クラブ学習会資料の 31 頁参照）
　太田下野守氏房の妻は、西新井の斎藤家に落ちのびようと五歳の岩月丸を連れて（原文では「抱き」となっている）城から逃れ、野島の地蔵尊（浄山寺）に来て、夫の勝利を祈願した。このとき地蔵の両目から涙が落ちるのを見て、勝利が無いことを悟った。そして妻は、岩月丸を斎藤光郷の子光高に預け、自らは地蔵尊の前の浄庵沼に、身投げした。後に、この遺骸は西新井の斎藤家屋敷に流れ着いた。そこで、光高はこの遺骸を葬り、椿の木を印として植えた。それで人々はこの塚を「椿割塚」と呼ぶようになったという。
　岩月丸を養育した斎藤光高は、徳川家康に仕えるため斎藤家を出る。岩月丸は光郷の末の娘を妻として斎藤加左衛門尉氏貞となり、斎藤家の二代目を継ぐ。初代斎藤若狭守光郷は「斎藤来由」によると、敵の岩槻城攻めの時の天正十八年六月十日に没したことになっている。
（出典『荻』）

⑥**西教院**：旧埼玉郡 西新井村

『風』では宗派は浄土宗、**（旧）越ヶ谷宿天獄寺**（てんがく）の末、山号・寺号は**日照山光明寺**、**元亀**（げんき）**三年（1573）二月七日**に亡くなった**誠蓮社法誉**（ほうよ）という僧が開山、本尊は**阿弥陀如来**であることが書かれています。

1．馬頭観音像付き庚申塔（宝暦十三年（1763））

2．青面金剛像庚申塔（寛保三年（1743））

3．不動明王三尊像（年号不詳）

4．「徳本行者」の名号塔（文化十四年（1817））

※　石塔では「徳木」と刻まれているが、「**徳本**」の誤りである。

徳本行者とは、宝暦八年（1758）の紀伊国（和歌山県）の生まれで、念仏を広め活躍した浄土宗の代表的な念仏僧。各地に独特の書体による名号塔が多く残されている。

越谷市内では、林泉寺にある名号塔（増林４３番）や、天獄寺にある名号塔（越ヶ谷１８番）があげられる。

尚、旧長島村の内山家（当時の名主であり、西教院の檀家）に、「南無阿弥陀仏　徳本（花押）」と毛筆で書かれた真筆の掛け軸がある。

5．（丸彫り）地蔵菩薩像（享保三年（1722））

6．名号塔（享保十八年（1733））

7．名号塔（享保十二年（1727））

8．地蔵菩薩像付き庚申塔（万治二年（1659））

9．阿弥陀如来像付き庚申塔（寛文三年（1663））

１０．斎藤家初代の墓塔（天正十四年（1586）　※造立年代は不詳）

※斎藤家は江戸時代に西新井村の名主を代々勤めた家柄である。

この墓塔は後世に造立された斎藤家初代の斎藤若狭守光郷と
その妻である。

１１．斎藤徳三郎白扇入道の墓塔（慶応三年（1867））
（出典『荻』）

後谷村（うしろや）

『風』では「**元禄十一年（1698）五月**米倉丹後守に賜はれり」と書かれていますが、「**元禄十一年（1698）五月**」は「**元禄十二年（1699）正月十一日**」の誤りです。

出典：群書類従完成会／編（1980）『寛政重修諸家譜』第三、続群書類従完成会、p.288

『風』では旧**後谷村**（うしろや）の「**小名**（こな）」は、葭谷（あしや）組、内谷耕地であることが書かれています。

『風』では旧**後谷村**（うしろや）の鎮守は、**光明院持ち**の「**稲荷社**」であることが書かれています。

⑦光明院跡（根郷自治会館）：旧埼玉郡 後谷村

『風』では宗派は新義真言宗、**（旧）瓦曽根村照蓮院**の門徒、本尊は**薬師如来**であることが書かれています。

『郡』では**明治八年（1875）**に廃されたことが書かれています。

廃された現在でも、地元の方々の間では、「薬師様」と呼ばれています（2018年5月12日に聞き取り調査を行いました）。

１．文字庚申塔（寛政十二年（1800））
２．普門品供養塔（寛政十二年（1800））

３．青面金剛像庚申塔（正徳四年（1714））

※腕の数が 10 本

４．青面金剛像庚申塔（嘉永三年（1850））

※鬼（邪鬼）が 2 体・親猿の目を子猿が手で覆っている

５．六十六部廻国塔（享和二年（1802））

６．百箇所巡礼搭（天保七年（1836））

（出典『荻』）

⑧**越谷陸軍飛行場跡**：旧埼玉郡 小曽川村・砂原村・荻島村・末田村・高曽根村・孫十郎村

『岩槻市史　通史編』では「**新和飛行場**の建設と工場の疎開」と題して、以下のように書かれています。

「昭和十九年に入ると本格的な本土空襲がが始まり、飛行場や軍需工場が地方に分散するようになった。

市域でも新和村と荻島村にまたがる新和飛行場の建設が昭和十九年七月始まった。この新和村飛行場について岩槻町の勤労報国隊要項にそって述べよう。

まず、勤労報国隊は、町内十八区の区長又は区長代理を中隊長とし、その下に適宜分隊を置くものとした。分隊長は役場で用意した分隊旗を持ち、隊員を引率して、軍の指示に従って作業をする。作業時間は、午前七時から午後五時までとし、報酬は男子一日六円、女子一日三円であった。これは後日役場で支給された。ここで岩槻隊編成表によって七月・八月の各中隊（区）の出勤予定状況を見ると、最も多かったのが一二中隊（区）で八月八日から十二日、までの五日間に二四四人であった。また一八区のように八月三一日に二一人という

少数の中隊もあった。これは、区の規模と隊員資格者の人数によったものであろうが、男手の少なくなった各家庭にとって大きな負担となったことは明らかである。こうして、七月には第一区から第九区までで八五三人、八月は一〇区から一八区までで九一八人が出勤した。

しかし、工事はなかなか進まなかったようで、昭和二十年四月には、岩槻町長から各町内会長あてに、勤労奉仕隊の追加出勤要請が出された。それによると、作業内容は滑走路の整地のトロッコ押しで、町としては四月二十九日から五月三十一日まで毎日一七人が割り当てられ、それを一八区に割り当てている、作業時間はほとんど変わりないが、報酬の支払い方法は大きく変わり、一日で引率者と優秀男子が四円三〇銭、一般男子が三円三〇銭、一般女子二円五〇銭に対し、優秀女子三円五〇銭と賃金に格差を設け、しかも日銭で支払った。

なりふり構わぬ突貫工事の様がうかがえる。

当初は昭和十九年九月二十日完成予定であったが、悪天候その他で著しく工事が遅れ、翌年にわたってしまった訳である。しかしこうして完成した飛行場も同時に大門村に建設された燃料や弾薬の貯蔵庫とともに使用されないまま終戦を迎えた」

出典：岩槻市史編さん室／編（1985）『岩槻市史　通史編』岩槻市役所、P.1115-1117

『越谷市史 第二巻 通史下』では「**荻島飛行場**の建設」と題して、以下のように書かれています。

「荻島村と新和村にまたがる**荻島飛行場**の建設工事は、暗号名を「ソヒノコ」工事と称され、東部軍経理部陸軍建技大尉が工場長でこれにあたったが、その

施工は主に翼賛壮年団を中心とした近村の勤労奉仕隊によって進められた。

昭和十九年七月、飛行場建設工場長の発した勤労奉仕隊派遣の要請書によると、時間は六時三〇分現地集合で、遅刻者は就労を拒絶することがあるというきびしいものであった。この奉仕隊派遣要請に対し翼賛壮年団は、「事態ハ極メテ重大デアル、サイパンノ全将兵戦死、又大宮島ニ敵上陸、誠ニ重大事中ノ重大事態ナリ、一旦緩急アラバ義勇公ニ奉ズベシノ詔命ヲ畏ミテ、今ゾ我等神州男子ノ本面目ヲ発揮シ、敢闘ニ死スベキ秋ダ」として、各団員の出勤を促したが、団員は団服を着用、昼食・水筒持参でこれに参加した。たとえばこの動員数を増林村九月二日をとってみると、男六二人、女四人計六六名であった。

飛行場建設奉仕隊は、地域別に南部・中部・北部に分けられていたが、南部地区九月二日までの出勤回数をみると、増林村一二回、新方村一六回、出羽村五回、蒲生村二二回、八条村三一回、八幡村一八回、桜井村四回という成績であった。この工事は同年九月二十日に完工する予定であったが、連続した悪天候その他でいちじるしく工事は遅延した。このため新たに追加工事の施工命令が発せられ、同時に同年十月十日までの勤労奉仕隊の派遣が要請された。なお飛行場建設にともない燃料や爆弾の貯蔵庫が足立郡大門村に設置されたが、これらは実際に使用されないまま、終戦を迎えた」

出典：竹内 誠（1977）『越谷市史 第二巻 通史下』越谷市役所、 P707～708

「NPO 法人越谷市郷土研究会ホームページ」では「戦争遺跡・幻の**越谷陸軍飛行場**」と題して、以下のように書かれています。

かつて、越谷から岩槻にかけて陸軍の飛行場があった事実が忘れられようとしている。しかし、今もなお兵舎や蓋をした暗渠、飛行場の一部の施設の跡が残り、当時の滑走路や誘導路が道路として利用されている。「しらこばと水上公園」に向けて北に一直線伸びている道路がある。コンクリートだった滑走路の名残である。越谷の荻島村から岩槻の新和村にまたがる飛行場であった。地元では通称「荻島飛行場」「新和飛行場」とか、新和にいわ村の論田地区にあったので「ロンデン飛行場」とも呼ばれた。

飛行機を導く誘導路は、滑走路の北端と南端を東側に突出したカマボコ型で結ばれていて、現在でもその大部分が道路として使用されている。戦車が通っても壊れない頑丈な蓋がされた暗渠は、滑走路の東西に平行して残っている。特に西側の方はほぼそのままの状態で残っている。西側暗渠の西方には格納庫跡のコンクリートの床下壁が残っている。さらに少し離れた西隣には巨大なコンクリート台の残骸が目立つように独立して残っている。また、「しらこばと水上公園」の西方の離れた所には、台地を削った隠し格納庫と伝えられる掩蓋壕（えんがいごう）跡がある。

終戦の前年、昭和十九年七月に地元の農家十三軒が強制的に立ち退かされて突貫工事が始まった。終戦の年の八月上旬に完成したが、十五日の終戦を迎えることになる幻の飛行場となった。

荒谷仁氏の目撃談によると四度ほど使われたという。未熟な操縦士によってでんぐり返りながら不時着した戦闘機があった。また「雷電」戦闘機や「屠龍（とりゅう）」爆撃機が着陸した。さらに戦後、米軍のＰ５１戦闘機が不時着したのである（注1）。

※（注1）詳細は平成二十七年三月発行の「川のあるまち第３３号」の「ロンデン飛行場史話」（荒谷仁氏著）を参照。

出典：加藤 幸一（2015）「戦争遺跡・幻の越谷陸軍飛行場」
http://koshigaya-kkk.sakura.ne.jp/150810_hotk_oh_kk.pdf

⑨　南和寺（ベトナム寺院）：旧埼玉郡 小曽川村

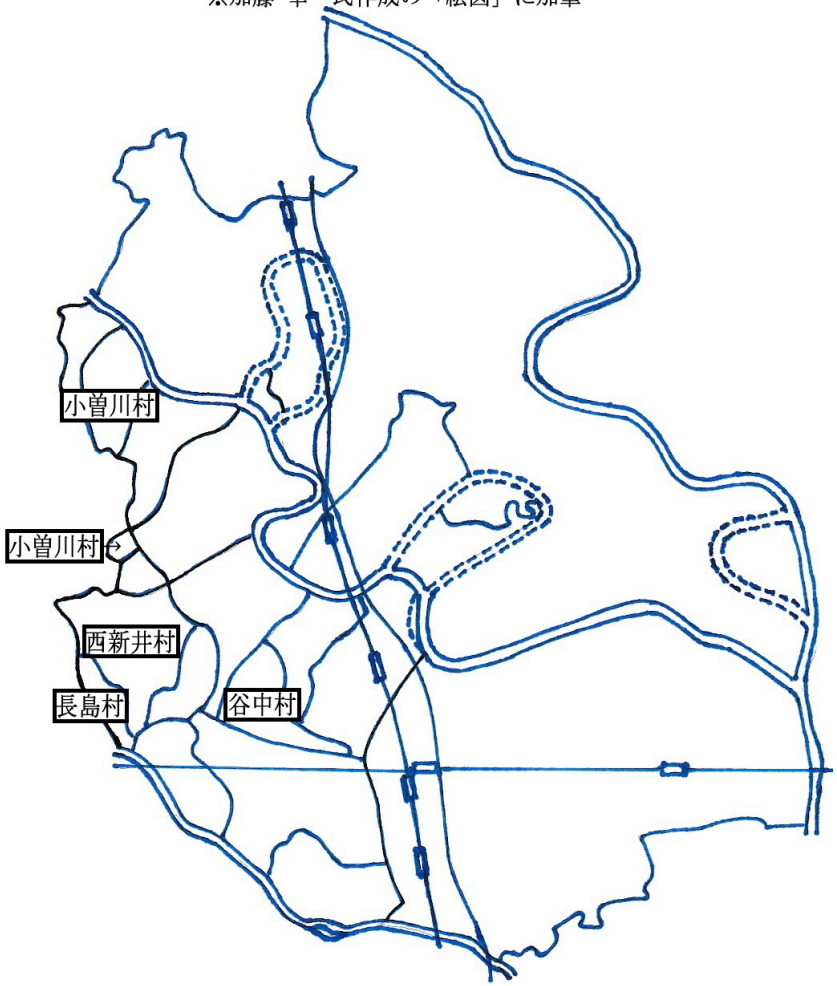
「南和寺」の命名由来は、ベトナムの漢字表記「越南」と日本の「和」を組み合わせたものです。

「しらこばと水上公園」バス停前で解散　午後０時３０分頃

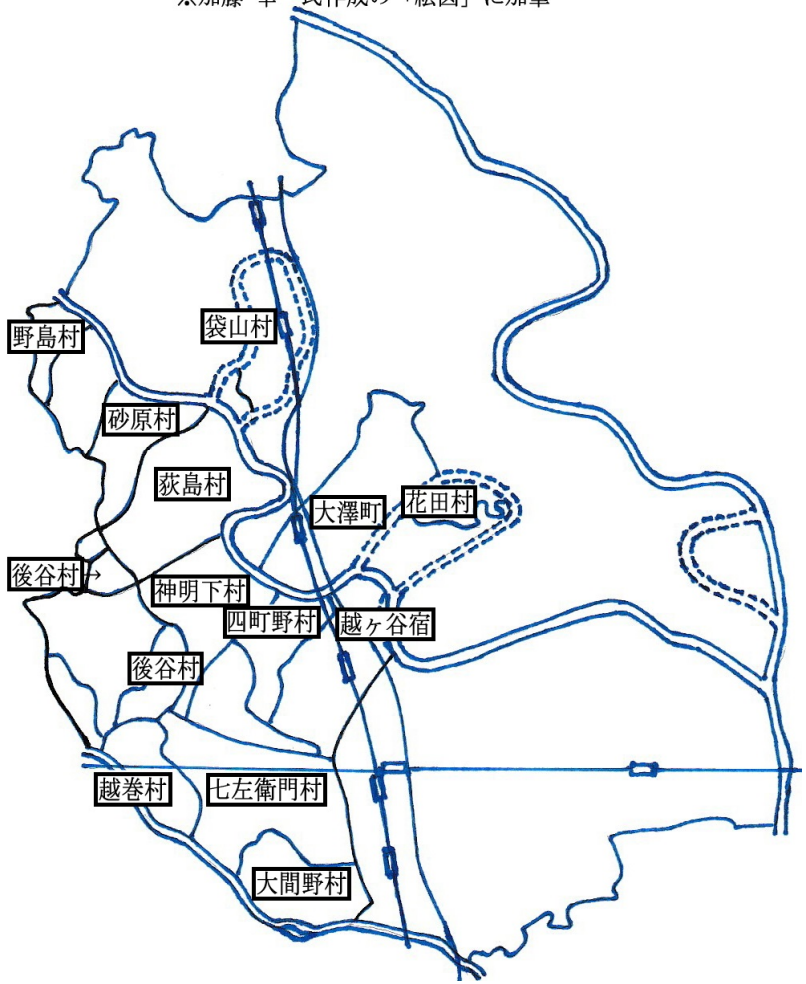
※　朝日バス「越谷駅西口」行き
　　午後０時４０分・１時００分・１時２５分 始発がございます。

さいたま市立浦和博物館編（2011）『浦和博物館特別展 日光御成道 展示解説シート』
さいたま市立浦和博物館より引用

「岩槻領(現越谷市内・元荒川右岸のみ)」の「四ヶ村」
『新編武蔵風土記稿』［第三期］第十巻、雄山閣、1963、143～146頁
※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆

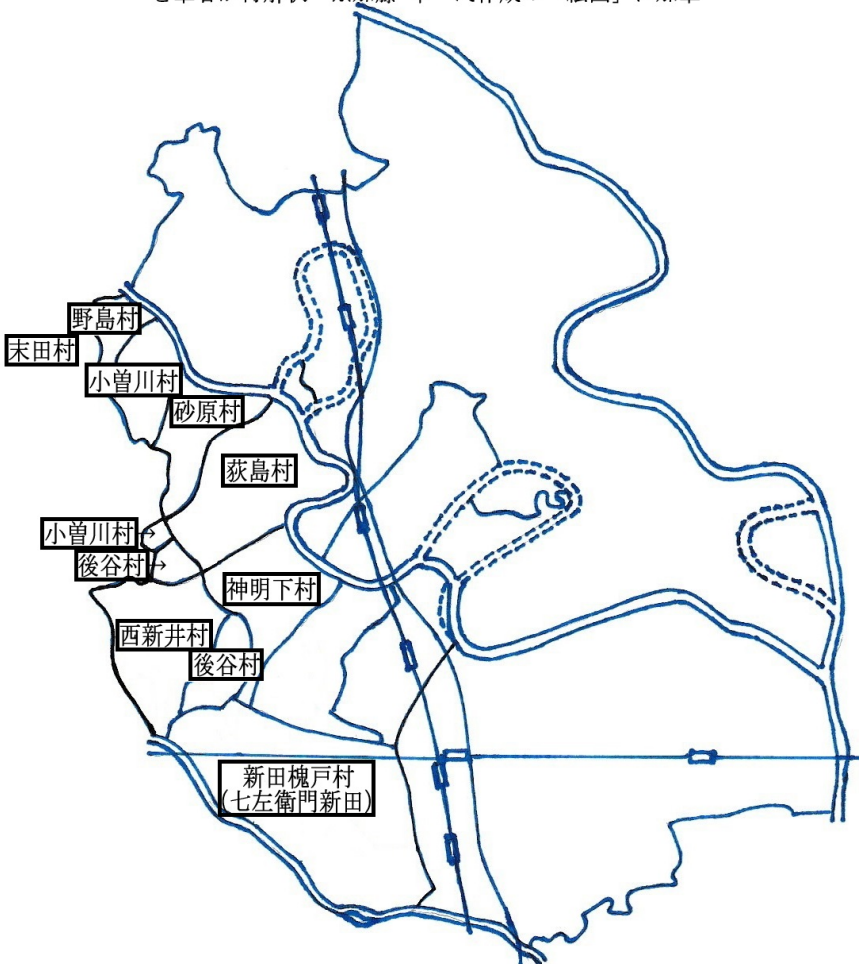


「越ヶ谷領」の「一宿一町十一ヶ村」(「寺領」を含む)
『新編武蔵風土記稿』［第三期］第十巻、雄山閣、1963、147～154頁
※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆

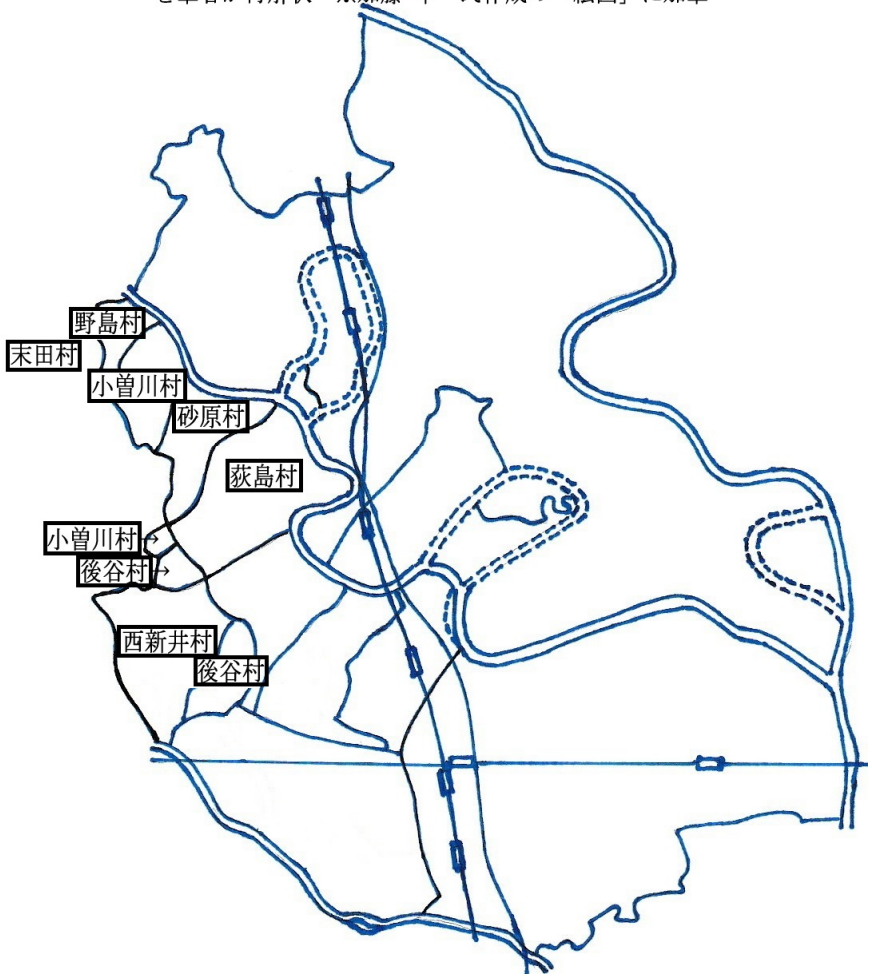


「岩槻領」の四ヶ村と「越ヶ谷領」の一宿一町十一ヶ村

「土屋領」(寛文九年(1669)六月二十五日以降)の「九ヶ村」(「寺領」を含む)
『土浦市史』附録、土浦市史編さん委員会編、土浦市史刊行会、1975
を筆者が再解釈　※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆



「土屋領」(寛文二年(1662)二月二十二日以降)の「七ヶ村」(「寺領」を含む)
『土浦市史』附録、土浦市史編さん委員会編、土浦市史刊行会、1975
を筆者が再解釈　※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆



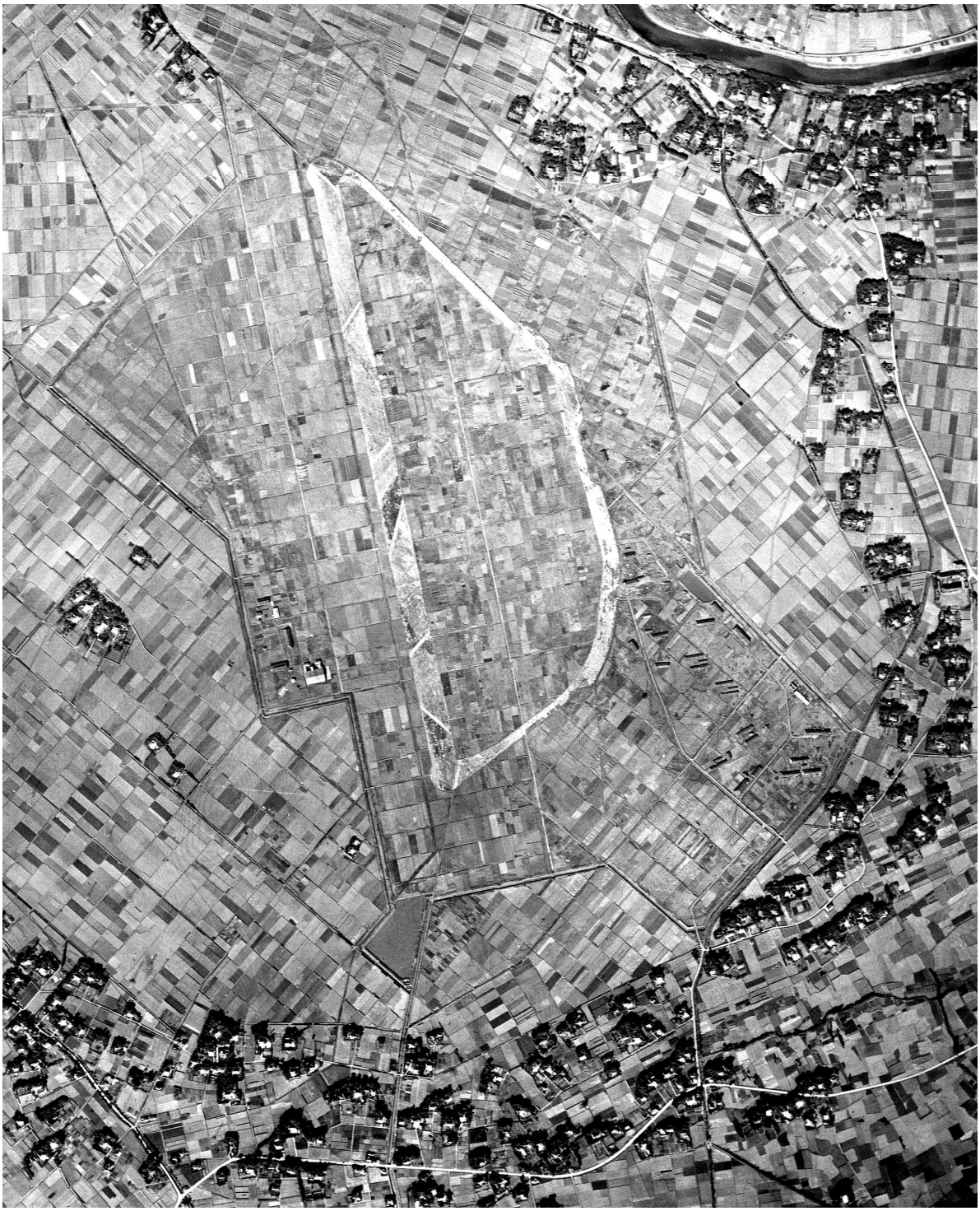
「土屋領」の変遷（寛文九年（1669）← 寛文二年（1662））

国土交通省 国土地理院 「地図・空中写真閲覧サービス」を加工して作成

昭和22年(1947)10月23日撮影の空中写真では、「越谷陸軍飛行場跡」の周囲のほとんどが、「一重」の「排水路」で囲まれていますが、約1年7ヶ月前の昭和21年(1946)3月26日撮影の空中写真では、「越谷陸軍飛行場跡」の周囲の約3分の2が、「二重」の「排水路」で囲まれている様子がわかります。

空中写真データ：整理番号 USA コース番号 M85-A-5VV 写真番号 27 撮影年月日 1946/03/26(昭21)
撮影地域 野田 撮影高度(m)6096 撮影縮尺 39533 カメラ名称 不明 焦点距離(mm)154.200
カラー種別 モノクロ 写真種別 アナログ 撮影計画機関 米軍 市区町村名 越谷市

※ 国土交通省 国土地理院コンテンツ利用規約
1．当ウェブサイトで公開している情報（以下「コンテンツ」といいます。）は、
どなたでも以下の1）～7）に従って、複製、公衆送信、翻訳・変形等の翻案等、
自由に利用できます。商用利用も可能です。（後略）

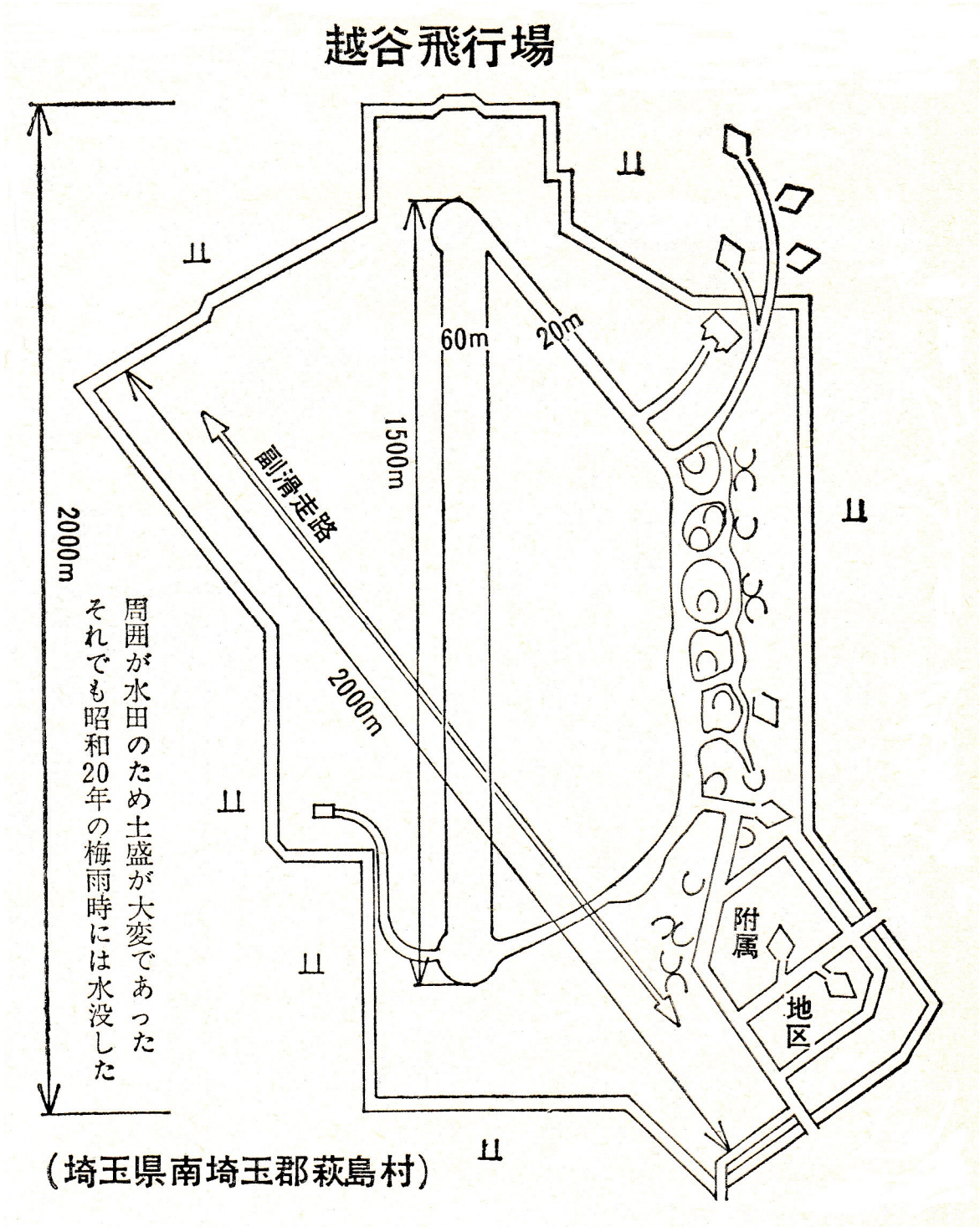


国土交通省 国土地理院 「地図・空中写真閲覧サービス」を加工して作成

空中写真データ：整理番号 USA コース番号 R393 写真番号 167 撮影年月日 1947/10/23(昭22)
撮影地域 野田 撮影高度(m)2499 撮影縮尺 16400 カメラ名称 K-17 焦点距離(mm)152.400
カラー種別 モノクロ 写真種別 アナログ 撮影計画機関 米軍 市区町村名 さいたま市岩槻区

※ 国土交通省 国土地理院コンテンツ利用規約

1．当ウェブサイトで公開している情報（以下「コンテンツ」といいます。）は、
どなたでも以下の1）～7）に従って、複製、公衆送信、翻訳・変形等の翻案等、
自由に利用できます。商用利用も可能です。（後略）



第一〇飛行師団編合
第一四一飛行場大隊（越ヶ谷）
「越谷飛行場」
山本 茂男 編（1973）『B29 対 陸軍戦闘隊』今日の話題社
p.121,124 から引用